

## 図版解説

## 石山寺多宝塔の快慶作本尊像

松島 健

琵琶湖南端から流れ出る瀬田川の西岸、伽藍山の麓にある石山寺は、奈良朝創建を誇る近江地方屈指の古刹であり、観音信仰の霊場としても名高いが、秘仏本尊如意輪観音像を祀る本堂東北の高台に南面して立つ多宝塔も、鎌倉初期に遡る数少い古例として知られ、早く明治三二年、特別保護建造物に、昭和二六年には国宝建造物に指定されている。

しかし、この多宝塔初重の須弥壇上に祀られる本尊大日如来像については、塔内間近での拝観が特に願い出ない限り許されないという事情にもよるものか、従来、識者の間でもほとんど注目されることがなかった。

度々の修理を受けながらも、多宝塔が今に伝えられている以上、塔の本尊であるこの大日如来像が、塔創建時に遡るものである可能性はきわめて大きく、筆者は以前から本像の詳しい調査の機会を得たいものと思っていた。

昨年六月、寺側の御好意により、漸くその念願を果すことができ、しかも、鎌倉時代の名匠快慶の造立銘の発見という望外の成果を得ることができた。

銘記は、頭部内にあるため、完全には判読できず、なおファイバー・スコープ等を利用した精査を必要とするが、以下取敢えず今回の調査結果を報告し参資に供したい。

大日如来像は、像高一〇一・七cm、髮際高七四・九cmの、いわゆる等身大像で、正面頂を花飾風にまとめた高い髻を結い上げ、八方の半切花形飾を付した天冠を戴く。地髪部は天冠上のそれを除いて細かく毛筋を刻み出し、鬢髪一束を両耳半辺にかけ、耳後から左右各髪一束を垂らし、肩に接して七方に分け各波状に散らす。

顔はほぼ正面向きで、智拳印を結び、条帛・裳・腰布を着け、右足を外に結跏趺坐して金剛界大日如来像の通形を示す。

用材は桧で、頭体軀幹部は正中線で矧合わせた二材(ともに木心を内側に外し、椗目を正背面にだす)製とし、内削りを深く施し、三道下方で割首とする。これに両脚部横一材、両膝奥各一材を矧寄せ、各内削り、両手を各肩・臂・手首で矧ぐ他、髻・垂髪・裳先を別材製とする。玉眼は、瞳を黒色・朱の縁取りとし、目頭及目尻を群青とする。玉眼押え木は左右別製で、各上下から数本の木釘(竹か)でとめ、現状、周辺に黒い漆木屎様のものを塗るが、これは後の所為かとも思われる。

表面は頭髮部をのぞいて錆下地漆箔とし、条帛や裳には斜格子田字入、七宝繫などの切金文様が布置されているが、これらの表面仕上げはすべて後補であり、表面に古い断文が全くみえないことから、下地からやり直されていると考えられる。やや赤味を帯びた箔や、切金文様のかたちなどから、およそ江戸時代前中期頃と推定されるが、文化六年(一八〇九)の僧正尊賢の『石山要記』に、「近代修復之時有俗家施主改肉色為金色像可謂寺僧不案内者也但金剛界大日身色為金色之事経軌中有説所」とあって、文化六年以前に補修されたことを伝えている。

銅製の宝冠、胸飾、臂・腕釧などの仏身装厳具も、本体の補修と同時期のものとみられるが、頭部内(右玉眼押え木下方)に、次の如く判読される朱書修理銘が認められた。

再興□

大□□

□安□□

□□三月□□

右の銘記のうち、三行目の「□安」は年号とみて誤りないが、文化以前で「安」がつく年号としては、慶安(一六四八〜一六五二)のみであり、本体の切金文様はもとより、現存の円光背や台座もほぼこの頃の補作と考えても矛盾がない。

本寺蔵の『座主伝記』は、慶長年間(一五九六〜一六一九)に、豊臣秀吉の側室淀君が石山寺本尊観音菩薩に帰依して伽藍を再興したことを伝えているが、この時修造された堂塔の中に多宝塔の名もみえ、装いを改めた建物に合わせるために、その

挿図3 同 背面

挿図2 同 右側面

挿図1 大日如来像 左側面  
滋賀 石山寺

挿図6 同 像底

挿図5 同 頭部斜右側面

挿図4 同 頭部左側面

本尊の漆箔をおき直し、光背・台座を新造して面目を一新したものと推察される。

本像頭部内には、この修理銘の他にも注目すべき墨書が見出された。頭部の割孔が小さく、銘記は顎裏辺までに及んでいないため、そのすべてを判読することはできなかったが、主要な部分はおよそ次の通りである。

(一)左玉眼押え木の上下及左方

□

万アミ 尼覚

タ仏 (玉眼押え木) ミタ仏

又阿阿阿阿 (耳孔)

□ □ ミタ仏

金アミタ仏 □ アミタ仏

土用 □ □

挿図7 同 像内墨書銘

## (二)右耳孔左側

南无阿□□佛□□

その書体は先の再興云々の朱書銘とは明らかに異なり、造像当初の記とみて誤らないものと思われた。

「真阿弥陀仏」が、鎌倉時代の名匠快慶が法橋位を得る以前に自らの作品に記した称号であることは言をまたず、「金阿ミタ仏」、「万アミタ仏」、「円アミタ仏」の名も快慶諸作品の造像銘中にしばしばみることができ、銘記の体裁からは本像を仏師快慶の作することに疑問の余地はない。

円阿ミタ仏の右側に記される尼覚窓は、本像造立の願主かあるいは単に結縁者の一人かと思えるが、『石山寺縁起』にいう亀谷禅尼なる者のことが想い起こされる。即ち、この『縁起』によれば、建久の源平争乱の頃、源頼朝の命を受けた中原親能が、山城国和束における謀反人との戦いのぞみ、その戦勝を石山寺の毘沙門天に祈願、その加護により勝利を得たのち、報恩のため、この寺に勝南院を建立、さらに親能の妻である亀谷禅尼も宝塔院を建て、本尊大日如来に頼朝の鬢髪を籠め奉ったというのである。

禅尼は頼朝の乳母であり、彼女の請を入れた頼朝の寄進による再興であったとの伝承もあって、現在、多宝塔の西辺に並び置かれた二基の鎌倉時代の宝篋印塔(各重文)も、その一つは頼朝公の、他は亀谷禅尼の墓といわれている。

この亀谷禅尼と尼覚窓とを直接に結びつける史料は見出せず、今後の検討に俟たねばならないが、多宝塔の建立が、先の『縁起』にいうように、建久の頃であることは、昭和三四年の塔解体修理時に発見された須弥壇上榎裏面の「大法師・・・建・寅十二月廿日供養」の墨書によって裏付けられた。即ち、建久五年(一一九四)に造営が了り、落慶供養が行われたことが明白となった。(石山寺本堂修理工事報告書付石山寺多寶塔修理要録)

塔の本尊である大日如来像も遅くともその建立供養の時までには完成していたと考えざるべきであろう。

なお、銘記(二)の右耳孔左側の「南无阿□□佛□□」の一行は、作者快慶と密接な関わりがあった当代の傑僧俊乗坊重源と結びつけて考えたいが、単に弥陀名号を記

したものであるかも知れず、これも末尾の二字の解明に俟ちたい。

ただ、鎌倉初期の石山寺復興に何らかの関わりがあったとみられる亀谷禅尼の夫中原親能は、治承の兵火に焼亡した東大寺再興に際して、大仏殿の二菩薩四天王像のうち、虚空蔵菩薩像造立を助成しており(『吾妻鏡』建久五年六月二八日条)、翌六年三月十日に行われた東大寺総供養には頼朝に供奉して列席している(『吾妻鏡』)。

興味深いのは、『吾妻鏡』建久六年五月二四日条にみえる次の記載である。

「前掃部頭親能為將軍家御使向高野山。是東大寺重源上人去十三日逐電。在彼山之由。近日風聞之間。可歸洛之旨。依被誘仰也」

重源上人が高野山に逐電した理由についてはふれられていないが、とまれ、使者親能の説得が功を奏したものが、二九日に到って、上人は頼朝の請をうけて山を降り帰来している(『吾妻鏡』)。

この使者の役目がいかに重要なものであったかは、『吾妻鏡』に「將軍関東御下向事。日来依被尋彼行方延引。至来月者定可預除祇園忌歟」とあることから察せられるが、頼朝が親能にこの大役を命じたのは、親能と重源上人とが、昵懇の間柄であることを知っていた、あるいは御家人間では周知のことであったためかと思える。

案ずるに、親能は東大寺復興造営を通して、上人の知遇を得るに至ったのである。

『吾妻鏡』によれば、親能は、承元二年(一一〇八)二月十八日、六九歳で歿しているが、正治元年(一一九九)六月三〇日に頼朝の姫三幡が御年一四歳で亡くなった時、乳母父であった親能は、宣蒙法橋を戒師として出家剃髪、以後、「掃部入道」、「掃部頭入道寂忍」の名で登場する。

乳母である親能の妻もこの時夫と共に仏門に入り、この後、亀谷禅尼と呼ばれるようになったのではなからうか。前にもふれたようにその法名については明らかでないが、夫親能のそれが「寂忍」であることを思えば、本像銘記にある「覚窓」の名はそれにふさわしいものではないか。

亀谷禅尼の剃髪出家と異なり、親能のそれは乳母父として政治的配慮もあったかと想像されるが、親能はかつて南都において不動明王像造立を沙汰、また亀谷の自

邸内に持仏堂をそなえるなど(『吾妻鏡』)、本来、信仰心の篤い人物であったかに思われ、その彼が東大寺大勧進重源上人の警咳に接して私淑帰依するに到ることは充分に有りえることであろう。

以上の想定が正しいとすれば、親能の妻亀谷禅尼の発願あるいは結縁による多宝塔本尊の造立に際して、夫親能が敬慕する重源上人に対して、御衣木か開眼供養いずれかの導師を懇請しうることもまた有りうることで、銘記(二)の「南无阿□陀佛□□」の墨書は、重源その人の名として記されたものとも考えられよう。

さらにこの大日如来像造立が快慶の事蹟としては珍しく鎌倉幕府御家人関係のものであることを思えば、禅尼は本尊造立の仏師についても重源上人にその選定をゆだねたかと想像される。

以下、資料のないままに、少々臆測を重ねると、石山寺の鎌倉初期の復興は、各地方における名刹の復興を通して民心の収攬をはかった頼朝の政策の一環として行われたもので、御家人である中原親能がその造営の任にあたったかと思える。その中であって、宝塔院とその本尊との造立には、特に願ってその妻である亀谷禅尼が結縁した。おそらく、正治元年(一一九九)に亡くなった頼朝の姫三幡の菩提を弔う為であったろうが、三幡姫の乳母亀谷禅尼がいつしか頼朝の乳母として誤り伝えられるに到ったのではないか。『縁起』の伝える多宝塔本尊御身中に奉籠した頼朝の鬢髪なるものも、あるいは、三幡姫の黒髪ではなかったかと思われたりするが、いずれにせよ、先の調査ではそれらしきものを認めることはできなかった。髪を主とする像内奉籠の品々はいつの頃にか失われたと考えるべきであろう。

しかし、本寺にはもと多宝塔の本尊であったと伝える平安前期の金剛界大日如来等身大坐像が遺存しており、明治末期の修理の際、胎内から高一八cmの銅製経筒に納められた陀羅尼一卷が発見され、その巻末には建久の奥書があったことが修理報告書に記されている。

この陀羅尼経一卷は修理後もと通り再納され、いま、これを確認することはできないが、昭和五八年の美術院による本像再修理の際に撮影されたX線透視写真により、一木造の背部に施された短冊形の内割部に金属製の奉籠物があることが判明した。その形状はやや特異ではあるが、明治の修理記録にいう銅製経筒にあたるもの

と考えて誤りなからう。

建久の年記を有するこの陀羅尼経が、多宝塔のもと本尊と伝える平安前期の大日如来像に納入されているということは、以下の想定を可能にするのではなからうか。

即ち、石山寺には、平安の初めに、現在の多宝塔の前身塔姿が建立され、その本尊としてこの大日如来像が安置された。その時期は大日像の造立年代から九世紀末〜十世紀初頭と考えられるが、『石山寺座主伝記』によれば当時の石山寺の座主は、仁和寺及醍醐寺座主、東寺長者、高野山座主などを歴任した親賢(八五三〜九二五)であり、彼による本寺の急速な真言密教化の過程の中で、空海建立の高野山大塔を初例とする多宝塔が、いわばその象徴として建てられ、純密至尊である金剛界大日如来像が造り祀られた。

その後、この前身多宝塔は何らかの災害―おそらく、『扶桑略記』、『百練抄』、『石山寺縁起』等が伝える承暦二年(一〇七八)の本堂回祿の時に羅災し、辛うじて本尊像のみ救い出されたが、多宝塔の再建を果せぬまま、他の堂宇―近年、新設の収蔵庫(豊浄殿)に移安されるまで本堂内陣の一隅におかれていたことを思えば、永長元年(一〇九六)、一月に再建供養が行われた本堂に安置されるに到ったのであろう。

建久五年、鎌倉幕府の援助を得て漸く多宝塔が建立され、合わせてその本尊が仏師快慶によって造立されるに到り、前身多宝塔の本尊である平安初期像にも補修の手が加えられ、胎内に陀羅尼経が納められたのではないかと。

この前期多宝塔については、その存在を証明する文献の類はもとより、境内地のどこかに存在したと思われる根拠もなく、建築史関係の論者も否定的なむきが多い(伊藤延男「石山寺多宝塔」『ミュージアム一六三』)が、先の『石山寺多寶塔修理要録』によれば、塔解体時に行われた発掘調査の際、九個の礎石に火中の痕が認められた他、須弥壇の直下を除く亀腹以内の地盤は地表下六〜九cmの位置に消炭の破片を含んだ厚さ約六七分位の層があったという。

礎石はいずれも二重の円座を削出した奈良朝時代の特徴を具備していることから、当代に創立され、承暦二年(一〇七八)に焼失した本堂の礎石を転用したものとされ、焼土層についても、前代の塔婆の焼失時のものである可能性を考慮しながらも、『修理要録』では、他から運び込まれた盛土か修繕工事の際の焚火の灰炭が散布



されたものであろうと結論づけられている。

この前身多宝塔の問題については、その本尊大日如来像と合せて、稿を改めて考察するつもりであり、ここでは要録調査報告にいう焼痕のある礎石と焼土層は、前身塔姿の存在とその焼失を雄弁に語る傍証として指摘するにとどめたい。

ところで、快慶作の大日如来像といえ、現在、東京芸術大学（以下芸大と略す）に所蔵される一躯が想い起こされる。

同大『蔵品図録 彫刻』には、明治三二年の買入とあるが、それ以前の伝来については詳かでない。

この像も石山寺像と同じ金剛界大日如来坐像で、像の大きさはもとより、別表(一)の如く各部の法量についてもほぼ等しい。条帛、裳、腰布などの扱い、折返った衣縁の処理や衣文表現、さらには正面頂に花飾風にまとめた高い髻、天冠台及その上縁に付した八方の半切花形、整然と刻出された髪筋などの細部に到るまで両者酷似している。

身体各部の構成、例えば肩や臂の張り、上体の前傾角度などに若干の差異が認められるが、これらは多分に芸大像の補修時の部材の組合せの拙劣さによるものとみている。

面貌表現にみられる若干の相違は、逆に石山寺像の近世の補修のためであり、特

挿図8 大日如来像 正面 東京芸術大学

に、本来、きわめて薄く仕上げられる上下脛は、眼裂にそって厚く錆が盛られて著しく尊容を害ねているが、なお、快慶独特の表現をうかがうことができる。

用材は共に桧であるが、既述した如く、頭体軀幹部を正中線左右二材矧とする石山寺像に對して、芸大像では木心を頭部後寄りにこめた縦一材から彫成し、正中線で左右に割矧いでいる。木心の位置からは、前後、左右いずれに割矧ぐことも可能であり、正中での左右割矧は明らかに意識的なもので、おそらく像の左右相称を正しくとらえ、智拳印を像の中心に正確に据えるためであろう。

もつとも、別表(二)の如く、快慶の坐像遺品からみると、その木寄せには確たる法則性がなかったよう、無位時代には、正中矧をやや多用し、それ以後は顔面中心に矧目が通らぬ前後矧を好んだかに思える。

軀幹材の他は、石山寺像と芸大像の構造はほぼ同様で、頭部や体部を方形に近く内刳りを施し、頭部を除いて黒漆塗とする。また正中矧(割矧)として当然であろうが、玉眼の押え木を左右別にするとも同工である。

芸大像の主たる銘記も、石山寺像と同じく頭部内にあり(一)耳辺には

円アマミタ

真阿弥陀佛 尼□□

介アマミタ仏

忍□

の墨書があり(二)左耳辺には

定阿□□

舜□

と読める二行の朱書がある。

石山寺像の体部内には銘記が認められなかったが、芸

大像の(三)頸部には

髪万阿弥陀仏

同 斜左側面

開眼円□

挿図9 の墨書があり、石山寺像と同じく万阿弥陀仏と円阿弥陀仏が制作に係わっていることが知られる。

挿図12 同 背面

挿図11 同 右側面

挿図10 同 左側面

挿図15 同 像底

挿図14 同 頭部左側面

挿図13 同 頭部正面

水野敬三郎氏は、『運慶と工房製作』（ミュージアム二九四）の中で、前者万阿弥陀仏は頭髪部の毛筋彫の、また後者円阿弥陀仏はその銘記の位置から、いわゆる開眼供養導師ではなく、玉眼を造った工人と解し、建仁三年（一一〇三）に快慶が造立した醍醐三寶院不動明王坐像頭部内銘記にみえる「御眼巧匠円阿弥陀仏信快」と同一人である可能性を指摘されている。

おそらくそうであろうが、万阿弥陀仏は頭髪毛筋彫ばかりでなく、快慶初期工房あるいは快慶を頂点とする仏像制作技術者集団における上座仏師として、細かい仕上全般を掌ったかに思え、それを「髪」の言葉で表わしたのではなからうか。

いずれにせよ、当時の新技法たる玉眼専門師の円阿弥陀仏と共に有力な仏師の一人であったことは間違いなからう。

以上の銘記については既に水野氏論文にも紹介されており、既知のものであるが、石山寺像の銘文の発見により、そのうちの（一）の「尼□□」と「忍」と読める一字を付した僧名とがあらためて注目される。

いずれも本像造立の結縁者とみられるが、石山寺像の「尼覚窓」のことが想起され、きわめて興味深いものがある。

ともに快慶無位時代と、その制作の時期をほぼ同じくし、二人の担当小仏師を共通するこの両像の存在は、快慶作品における分業制作あるいは造立の事情等を含めて快慶芸術を考究する上できわめて貴重といわねばならない。

芸大像の伝来が明らかでないことが惜しまれるが、先の『石山要記』には宝塔大日如来像について次の如き一文を書きとどめている。

「大日如来像者寶塔院退轉之後移他所今現在膳所城下寺院云々定説難治定者歟於塔者頼朝卿建立之由今申傳也」

ここにいう宝塔院とは『石山寺多寶塔修理要録』でも推定しているように、多宝塔そのものではなく、塔に奉仕する為の僧等が居住した付属建物のことで、これらを含めて院が形成されていたのであろう。

建久3 (1192)	京都・醍醐寺弥勒菩薩坐像 (像高 112.0cm) 正中線左右二材矧、割首
建久8 (1197)	滋賀・円福院釈迦如来坐像 (像高 56.3) 正中線左右割矧、割首
正治2 (1200)	和歌山・金剛峯寺孔雀明王坐像 (坐高 78.8) 前後二材矧、割首
建仁元 (1201)	広島・耕三寺阿弥陀如来坐像 (像高 74.0) 前後二材矧、割首
〃 (1201)	奈良・東大寺僧形八幡神坐像 (像高 87.1) 正中線左右二材矧、
建仁3 (1203)	奈良・文殊院文殊菩薩半跏像 (像高 198.0) 正中線左右二材矧、割首
建仁3 法橋叙位以前	京都・松尾寺阿弥陀如来坐像 (像高 89.3) 正中線左右二材矧、割首、 像内体部のみフキ漆塗
	京都・如意寺地藏菩薩坐像 (像高 52.2) 一木前後割矧、割首
承久3 (1221)	京都・隨身院金剛薩埵坐像 (像高 101.8) 一木前後割矧、割首

表(二) 快慶坐像作品 軀幹材構造

	石山寺	東京芸術大学
像高	101.7 cm	102.1 cm
髪際高	74.9	75.7
髻頂～顎	43.5	44.9
髪際～顎	18.1	18.1
面巾	17.9	17.4
耳張	22.6	22.1
面奥	22.1	23.1
臂張	53.7	
胸奥	23.8 (右)	23.6
腹奥	28.5 (含条帛)	28.0
膝高	13.5 (左)	13.4
〃	13.8 (右)	13.5
膝奥	51.0	52.1
膝張	74.0	72.0
光背高	123.0	
台座全高	78.5	

表(一)

このようにいわば塔管理の建物が退転した際に、塔の本尊が寺外に持ち出されるということも決して有えないことではないが、鎌倉初期の多宝塔本来の由緒ある尊像の移安について、これより以前の寺記の類に全くみえないことも不自然であり、それ故に著者尊賢も「定説難治定」と自らの不審の念を記したのであろう。

もつとも、芸大像が宝塔院内の一堂の安置仏で、その退転に伴なって膳所城下の寺院に移されたのち、明治期に芸大に入ったと仮定しても、制作の時期、像内銘記等に矛盾はない。芸大像の原所在の究明が俟たれる所以である。

なお、昨年の芸大大日如来像の調査の時、前記銘文の他、像内背部に「巧匠」と読める太い朱書が認められたことを付記しておく。

(後記)

石山寺大日如来坐像は、美術工芸課副島弘道技官と共に実査し、滋賀県教育委員会文化財保護課主査宮本忠雄氏、滋賀県立近代美術館学芸員高梨純次、井上一稔(現東京国立文化財研究所技官)両氏の協力を得た。